

歴史改蔵シリーズ①

絶望を希望にかえて、立て ロベスピエール！

さよなら

ロベスピエール先生

時はまさに18世纪末の救世主伝説

朝に道を聞かばタベにギロチンドロップも可なり
謎—革命軍に対する反乱軍は正規軍か?
シャルロット・コルデにピタッチ



ダントンも呆れるカードゲームブック
窓はレッスルエンジェルス本！

フランス革命とマイティ祐希子を
愛する市民に捧ぐ痛恨の一冊！！

レッスルの三色旗

二等市民物語

前田 播磨守

「フランスって、あのフランスっ？」

茶色の瞳をまん丸にして驚いている娘・永原に、俺はゆっ

くりと頷いてみせた。

「あ、あの、パリのフランス？」

そうだ。フランスのパリだ。紫紺の長髪が美しい少女・富

沢に、俺はこつくりと頷いた。

「で、でも、パリなんて……お金、大丈夫なのでですか？」

トレー・ニングウェアを着込み、手に竹刀を持つている娘・

越後が、頬を紅潮させて俺をじっと見ている。十分に

満足です。パリなんて、そんな贅沢は……」

頬と口元をヒクヒクさせながら謙虚な言葉を口にしている

彼女だが、喜びを押し殺しているのは表情を見れば丸分かり

だつた。いじらしい娘だ。賞賛に値する。

……俺なんかよりもずっと。

彼女たちはよみがえった。リコール・トウ・ライフ。

そして死んでいた俺の心に、再び火を灯してくれた。

リコール・トウ・ライフ。

だから俺は立ち上がった。経営は破綻した。だが俺は、

しかし、うまくいかなかつた。経営は破綻した。だが俺は、

四人の娘に解雇通知を出す前に、どうしても彼女たちに礼を

を送りたいと願つた。漫然と死を待つだけだつた俺の人生に、再びつ

かの間の夢をもたらしてくれた彼女たちに、最後のバカンス

のドアを、ゆきくりと、大きく開いた。俺は事務所

の向こう側は、革命期のパリの場末街だつた。

「今朝からだ。ドアの先がこんな風になつてしまつてな。つ

まり……戻れないんだ、日本に——現代に——

唚然とする三人の娘。俺は四人目の娘を見やつた。

「……別に」

赤いリボンの少女・武藤が、ポツリと呟いた——。

一、旗揚げ!!フランス革命軍

いぢれにしろ、衣食住の手当ではしなければならない。住に

ついでには、事務所で事足りるだらう。仮眠用に毛布を置いて

いたことが幸いした。衣は……いま着てある服とリング衣装で

我慢してもらおう。だが食は……致命的だつた。夜食用のカツ

麺が数個。これだけでは育ち盛りの四人の娘は、早晚餓死

してしまう。

ならば……働くしかない。

俺は、革命期のパリの街に一步を踏み出した。この一步は月面におりた宇宙飛行士の一步よりも価値があるかも知れない。だがその時の俺には、歴史ファンが感じるであろう夢のタイムトラベル的な感覚はまったくなかつた。ただ、今日どうやつて俺と彼女たちの腹を満たすかという不安だけが心を占めていた。

だがそれは、どうやら杞憂だつたらしい。

驚いたことに、言葉が通じた。でたらめだ。だが、俺の今までの人生自体がでたらめのようなものであることを考えると、いまさら驚いても仕方ないのかかもしれない。ここは素直に現実を受け入れることにした。

現実を受け入れて、彼女たちの興行——女子プロレスの試合——も取り付けてやつた。その興行は「ラ・ジヤボネーズ」と名付けられ、パリ市民の関心を呼んだ。

でたらめだ。だがこれも彼女たちのためだ。

「あたしのリングネーム、ジヤンヌにするねつ！」

茶色い瞳の娘、永原ちるが元気に俺に告げた。悪くない。

フランス風だ。俺は彼女を少し見直した。

革命政府である公安委員会を訪れた俺は、女性的な顔立をした若い男から、興行の会場は革命広場と告げられた。その男が革命政府の中核メンバー・サン＝ジユストだと俺がつたのは後のことだ。彼は俺たちに食料を届けてくれる手はずまで整えてくれた。フランス革命の精神をジヤボン、つまり日本の市民に伝えることがその条件だつた。食料のためだ。まは知らずまで整えてくれた。

俺は承知した。いざとなれば、富沢に三色マスクを付けさせ

てフランス仮面にでもすればいい。

そして興行の日がきた。

革命広場つて、コンコルド広場のことだつたのね

富沢が眼をキヨロキヨロさせていて、かくして、俺に連れ

られた四人のレッスル娘は、群集で溢れている革命広場の真

中に据えられたリングの上に立つたのだつた——。

(四) レイ・富沢礼子

異様な臭氣を放つ革命広場を後にして、俺たちはサン・ト
レノ街を目指した。とにかくあの耐え難い血の臭いから逃れ
るため、そしてなにより永原ちづるを助けるために、娘たち
も足早になつて行った。

サン・トレノ街にある指物師の家が、俺たちの目的地だつ
た。そこにフランス革命政府の首領・ロベスピエールが下宿
している。大家である指物師のおかみさんは俺たちを警戒し、
結局、俺と富沢の二人だけが中にとおされた。

「ううつ、ドキドキするう」

好奇心の強い富沢は、目をキラキラとさせている。おそらく俺のほかに彼女だけが面会を許された理由は「一番弱そ
うだから」であるが、そのことは彼女には黙つていてることに
した。

そして彼はそこにいた。鏡に向かつて、俺たちに背を向
て、一心に髭を沿つていた。俺は彼の背に嘆願した。可愛い
娘・永原を出獄させてくれと、懇願した。

ロベスピエールは、俺の言葉、いや存在すらを無視し続け
た。俺は耐えた。だが、もう一人の娘の紫紺の長髪は、怒髪
となつてすでに天を衝いていた。

「失礼にもほどがあるわ！ これでも喰らいなさい！」
いきなり富沢が動き出した。ボディスラムでロベスピ
エールを床に叩きつけてから一気にサソリ固め！

「……キミはそれで私を説得しているつもりか？」

「お黙りなさいつ！ 独裁者めつ……ああっ！」

ロベスピエールの足が、富沢の手からスルリと抜け、そし
て逆に富沢をステップ・オーバー・トウ・ホールド・ウイズ
・フェイス・ロック！ STFで捕えた！

「キミのやつていることは抜け穴だらけだ。私が完璧な論理
固めをお見せしよう」

顔面と足首を極められた富沢は、今日二度目の失神状態に
陥つた。ぐつたりとした富沢を仰向けに横たえたロベスピエ
ールは、しかし容赦なく、鏡台の上から飛び降りて彼女の首
筋に足刀を叩き込んだ。

ロベスピエールの剃刀ギロチン・ドロップ！

「革命を指導するためには、恐怖が必要なのだよ」

最高存在と呼ばれる男は、緑色の眼鏡をかけ、さもくだら
な。そうに富沢を見下すと、顎で俺たちに出て行くように促
した。俺は悔し涙を堪えて、独裁者の下宿を後にしてしま
た。

(五) ジーニアス・武藤めぐみ

指物師の下宿の前で、武藤が爬虫類のような顔の男と話
が会場入りの手はずを整えてくれるらしいわ」

武藤が淡淡と告げた。会場は国民公会議場！

独裁者め。奴はマキヤベリを知らないのだろうか。君主は
愛されずとも怖れられるべきだが、恨みを受けることだけは
避けなければならないのだ！

武藤が小さく呟いた。彼女の赤いリボンは革命の色ではな
い。それはルイ十六世を断罪したときの民衆と同じ、怒りの
色だと思ひ知れロベスピエール。

……負けたら死ぬだけさ。俺が。彼女たちと。

テルミドール（熱月）九日、議場を混乱に陥れたのは、愛
する者をギロチンで失うことに対する恐怖した二人の男だつた。愛
奴が倒れないなら、俺はこの場で死んでやる！」

愛人を革命の牢獄に奪われた男・タリアンが、手に短刀を
持ち、サン・ジユストに組み付いて乱入を阻止している。

「行けつ、レッスル革命の女神よつ！」

娘を牢獄に捕えられた男、つまり俺が叫ぶ。

天に向かつて、祈るがごとく、未来を信じて！

「たああああああああああああっ！」

空から、天使が降つてきた。両手を翼のように広げて、自
由に自由に、ひたすら自由に落下して――、自
ぶべつ！

――自爆した。武藤のフライングボディプレスをひらりと、か
わした革命チャンピオン・ロベスピエール。しかしそれは、か
天才・武藤の欺瞞策略だつた。次の瞬間、ひらりと舞つた
V字脚が独裁者の顎を捉えて粉碎した！

最高存在・ロベスピエールの体が、カクンと崩れ落ちた。
△V（ヴエー）！ ヴィーヴ・ラ・レボルシオーン！

議員たちの勝利の唱和！ 俺たちは独裁者を倒したのだ！

「やつた！ やつたわ！ ねつ見てたでしょ？」
興奮している武藤。やつぱりキミは明るくてお調子者のほ
うが似合つている。未来への扉は開いた。まあ征こう、僕のほ
好いなレッスルの娘らよ。いつまでも、どこまでも。

（了）